

Title	黒岩涙香の翻訳小説 : Bertha M. Clay原作の「古王宮」をめぐって
Sub Title	The newspaper serials, translated by Kuroiwa Ruikoh for Ko-Oukyu, from Bertha M. Clay as the original
Author	堀, 啓子(ホリ, ケイコ)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2006
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.91, No.1 (2006. 12) ,p.222(51)- 239(34)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	関場武教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00910001-0239

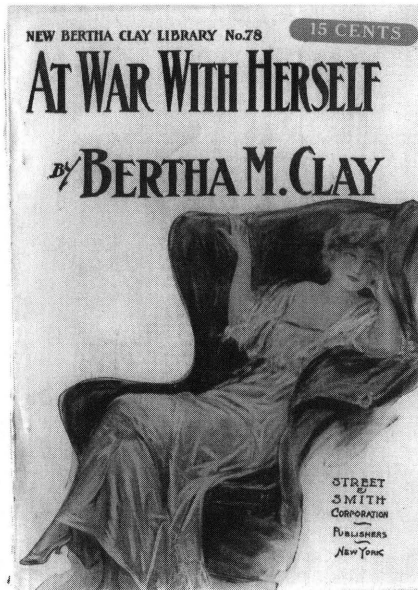
慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

黒岩涙香の翻訳小説

～ Bertha M. Clay 原作の「古王宮」をめぐる

堀 啓子



Bertha M. Clay 作 At War With Herself

黒岩涙香は明治の新聞人である。その衝撃的な報道や、大胆な論評、斬新な紙面構成の企画力はよく知られている。なかでも明治二十五年に創刊し、自ら主幹、主筆を担って数年で発行部数を全紙のトップに押し上げた、『萬朝報』における功績は大きい。新聞としては決して早い時期の創刊で

はなく、『國體新聞』『帝國新聞』など前後して興り、長くはもたなかった紙が多いなかで、『萬朝報』がこれほどの人気を博した理由のひとつに、同紙の連載小説が挙げられる。間断なく掲げられたそのほとんどは、涙香自ら筆をとったものだが、厳密に言えば涙香は「作者」ではない。涙香の手がけた多くの作品にはれっきとした原作があり、それをもとに書き直されたものであるからだ。当時、涙香小説を愛読していた読者も、それらが翻訳であることは熟知していた。英語に堪能であった涙香が多くの洋書を読破し、厳選した原著を独特の筆で日本化していたことは、涙香自身が公表していた事実である。そして『萬朝報』の多くの読者にとって重要であったのは、ただ小説の、筋の面白さだけである。その小説の原作や原作者の知名度、涙香の翻訳がいかに原作に即したのか、あるいは原作からかけ離れた内容に再構成されたものであったか、などという背景は、大衆読者にとっては何ら興味のないところであった。こうして、涙香の翻訳小説はつねに高い人気を博し、実際に『萬朝報』の売り上げは、それらの魅力が支えたところが大きい。ではその涙香小説の魅力とはどのようなところに見いだせるのであろうか。

I

当時、涙香の翻訳小説の人気は相当なものであったらしい。何かの故障で一日休載されると、読者からの不平が編集局に殺到し、「電話掛などは其言訳けに目を廻す程であった」（小日向仙之助「逸話」『黒岩涙香』扶桑社、大正十一年）と伝えられている。そこには、二つの要素があり、ひとつは厳選された洋書を以て翻訳の原作としたこと、もうひとつは〈翻訳臭〉を消したとされる涙香自身の卓抜した筆である。すなわち選び抜いた原作を、逐語訳ではなく、随所に涙香独自の工夫を織り込んで日本風に再構成することで、読者に親近感を持たせることに成功したのである。ならば、涙香はどのような原書を選んでいったのか、ということが問題となる。涙香は自らを、小説の作者ではなく翻訳者を以て自認している。そのため、多少の加筆修正を施そうとも、面白い翻訳小説を掲げるために何より重要な

のは、原作自体の面白さであると考えていた。それゆえ魅力的な原作を選ぶことを第一義とし、彼は多くの洋書を確認している。涙香の多読ぶりは、自他共に認めるところであった。『萬朝報』社員として、身近に涙香に接してきた緒方流水はこう回顧している。

彼が西洋小説に対する書淫は、殊に驚くべきものあり、書生の時彼は教科書又は教科書らしき硬本を読まず、明治二十三年の頃、既に人に誇つて曰く、『余が一読せる西洋小説は、優に一千部を越ゆ、この書淫に於て、恐らく余の右に出るものなからん』と、彼が神経衰弱の故を以て、明治廿五年都を退くや、書淫は一層其度を進め、暫くも手に西洋小説と横字新聞を措かず、寝も廢し、食も忘れたる程なりと云ふにあらずや。 (「黒岩涙香」『黒岩涙香』扶桑社、大正十一年)

生涯に、長短とりまぜて九十編以上の作品を翻訳した涙香は、こうして涉猟した英書の中から原作を選んだのである。その原作者は知られているだけで二十余名にのぼるが、就中、涙香が好んだ作家は三人いた。涙香は、彼らの作品を殊に愛読したらしく、それらの作者の作品を幾度も原作に選び、翻訳を手がけている。その三人とは F. Du Boisgobey、Emile Gaboriau 及び Bertha M. Clay である。前二者はミステリー作家であるが、『萬朝報』創刊後の涙香は、特に Bertha M. Clay を好み、この作家の作品を原作として同紙上に掲載した作品は、判明しているものだけで五作品にのぼる。かつて他紙の一記者であり、探偵小説を好んで扱っていた時代の涙香は、立場上、比較的自由であった。だが『萬朝報』を双肩に担った以上、涙香は以前とは比較にならないほどの重責を負っている。その涙香が、同紙の目玉ともなるべく連載小説の原作として、Bertha M. Clay を認めたのである。涙香が、この作者に期するものは相当に大きかったのであろう。涙香が手にした原書のなかには、いわゆる文豪による古典名作も多かった。だが彼は、たとえ無名の作者であっても大衆読者が諸手を挙げて歓迎する作品を的確に選んだのである。そうして Bertha M. Clay を原作として手がけられ

た作品は、読者から好意的に受けとめられた。以下、Bertha M. Clay 作品をもとにして涙香が連載した五作品を掲載時期順に記すと

『嬢一代』（明治二十六年—二十七年）

『絵姿』（明治三十二年）

『古王宮』（明治三十二年）

『雪姫』（明治三十二年）

『人の妻』（明治三十三年—三十四年）

『花あやめ』（明治三十五年）

となる。発表媒体はすべて『萬朝報』で、涙香は Bertha M. Clay を原作とする翻訳は他では手がけていない。

Bertha M. Clay は、日本の文学青史に名前をとどめるような作者ではない。だが実際には、日本近代の作家がこの Bertha M. Clay の作品を好んで下敷きとし、翻訳や翻案を成功させた例がいくつもある。Bertha M. Clay は伝説の多作家として名高く、十九世紀末から二十世紀初めに、英米を中心に世界各国で人気を博していた。その作品は英語圏では現在のアイルランド、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカ共和国にまで普及し、翻訳もヨーロッパ各言語にわたって出版されている。作品総数は千五百にのぼるといわれるが、ストーリー構成には Bertha M. Clay 特有の類型的な枠組みがあり、酷似した話も数多い。実際、“a particular kind of women’s novel with strong gothic characteristics” や⁽¹⁾、“mushy love stories”⁽²⁾あるいは“sensational romantic novels”⁽³⁾といった短い表現で、すべてが語られるほどの定型が Bertha M. Clay の多くの作品に共通している。

じつはこの作者名 Bertha M. Clay とは、複数の作家によって支えられたものである。もともと Bertha M. Clay という名は、英国人女性 Charlotte Mary Brane (1836-1834) という人気作家に与えられたペンネームであった。だが彼女が執筆する作品の人気に乗じてさらに多くの売り上げを望んだ出版社が、後年に多くの作家にこのペンネームを共有させたのである。以来

Bertha M. Clay という名はハウスネームと称される、複数作家による共有型のペンネームに切り替えられた。逆言すれば、もともと Charlotte Mary Brame によってステレオタイプの骨組みが作られていたからこそ、複数の作者がひとつのハウスネームのもとに結集し、類似傾向の作品を書き続けられたといえるのかもしれない。

II

ところで、この Bertha M. Clay の作品をめぐってはひとつの興味深い言説がある。それは、「涙香氏の翻訳小説」(『黒岩涙香』前掲)のなかで、千葉亀雄が以下のように語っている箇所である。

尾崎紅葉の『不言不語』は、たしかに西洋神秘小説の翻案らしいのであるが、それは文章の洗練を除いての外は、内容としてはさうした類の西洋小説にあつても廿五銭小説として其辺にころがつて居る底の恐ろしく格の下つたものである。(中略)もしさうした思想と傾向だけの価値から云へば、紅葉の拵んだ神秘小説は到底涙香氏の眼に映じた神秘味の敵ではない。

恐らく千葉は、尾崎紅葉の『不言不語』の原作もまた、Bertha M. Clay であったことは関知していなかったのであろう。明治二十八年に『読売新聞』に連載された『不言不語』が、翻案作品であることは発表当時から知られていた。だが、その原作はごく近年に発見され、措定されたものである⁽⁴⁾。それまでは長らく、原作は不明とされ、紅葉と同時代の人々にもあまり知られていなかった。その原作とは *Between Two Sins* というものだが、実際に比較して見ると、『不言不語』は筋のみならず、作品全体を覆うゴシック的な雰囲気も、原作にじつに忠実に再現された翻案作品であることがわかる。

だが前述のように、この Bertha M. Clay の各作品のストーリー趣向には、類似したものが多い。少なくとも若い女性向きの恋愛小説を目指すという

点では、すべてが同じ姿勢である。たとえば、先のリストに挙げた涙香の『絵姿』などは、やはり Bertha M. Clay 作品 *Ingledeew House* を原作とし、原作に忠実にストーリーを展開したものであることが判明しているが⁽⁵⁾、そこに登場する謎めいた暗鬱な館、秘密を隠し持つ高貴な女性、その話し相手に選ばれた若い美女、その美女が謎を解き明かす探偵役の一人称語りを担うこと、など多くの要素はみごとに『不言不語』と一致している。同じ原作者であることは措いても、『絵姿』は涙香作品中、最も『不言不語』に似た内容の作品といえるであろう。にもかかわらず、こうした涙香作品も熟読していたはずの千葉が、紅葉の選んだ『不言不語』の原作と、涙香の選んでいた原作というものに、隔たりを見いだしていたのである。

なぜそうした印象を受けたのであろうか。

たしかに紅葉の『不言不語』は聊か異色の作品である。内容は、秘されていた、ある許されざる罪が明るみに出たことで、一人の登場人物が破滅していくというものであり、作品の興味はその秘密の解明に終始し、少しずつ秘密が解き明かされるにしたがってその罪を犯した人物が追い詰められていく。ミステリアスな展開は新聞小説によく合い、「読売の花」と絶賛された。しかしその結末は、勸善懲悪と言うには、あまりに哀感をそそる衝撃的な秘密の暴露である。じつは Bertha M. Clay の作品は、ハッピーエンディングの恋愛小説であることを鉄則とするが、カソリックの精神を色濃く反映しているためか、一つの約束ごとがある。それは、登場人物が許されざる罪を犯した場合、その償いが厳しく求められるということである。すなわち贖罪のため、あるいはそれに代わるかたちでの殉教のためには、主要登場人物の死を描くことも辞さないというのが Bertha M. Clay の厳格な基本姿勢である。『不言不語』の原作 *Between Two Sins* は、そうした類の作品であった。恋愛の要素はむしろある。だが、ある女性登場人物の過去はあまりに重すぎた。そのため、彼女には大きな代償が要求されていくのである。

いっぽう、同じ Bertha M. Clay の、類似したストーリーを原作として扱いつつながら、『絵姿』の結末はまったく異なっている。『絵姿』の原作

Ingledeu House にも、罪や過ちといった要素がないわけではない。だがそれらの巻き起こした悲劇は誤解による部分も大きく、誤解のもとをつくった人物は過去の小さな過ちは十分に自覚し、悔いるのである。それゆえ終章において、若い登場人物は皆、望ましい結婚をして経済的にも恵まれた幸福な家庭を築いている。『不言不語』との決定的な相違は、登場人物に悔い改める余地が残されているか否か、という点であろう。そしてそのことが、尾崎紅葉と同じ *Bertha M. Clay* を好みながら、それを翻訳する段階で、『不言不語』とはまったく異なる世界観を作品に展開した印象を与えたのである。

そしてこの『絵姿』における涙香の作品傾向は、けっしてこの一作品にとどまるものではない。『萬朝報』が軌道に乗り、家庭的な小説を目指すようになってからの涙香は、作品の登場人物につねに贖罪と更生の余地を残そうとした。そのため、*Bertha M. Clay* を原作とするものなかでも、敢えて死を以て償わなければならないほどの重罪を描いた作品を避け、心を入れ替えることによって十分にやり直すことが可能な、身近な過ちを扱った作品を選ぶことに専心したのである。それは、こうした翻訳小説に文学上の価値を追求するのではなく、翻訳小説を以て「人の教育に資せん」「多数の俗人を教へん」と常々語っていた涙香のポリシーにも見合うものであったのだろう。

そのため涙香小説の結末は、教訓的かつ、未来へ希望をつなぐかたちが多い。「涙香の訳、概ね変化に富むと雖も、終局は目出度し目出度しなり」（緒方流水『黒岩涙香』前掲）や、陰鬱な話であっても「読者のくらい感じは、唯だ此の数行によつて端的に明るく解放され、もしくは感情の転換を與へられる。美しい人間らしい情味が、暗に罪惡の記録のあとから華やかに復活されて来る」（千葉亀雄『黒岩涙香』前傾）というように、結末の希望的な展開は常に注目されてきた。それは涙香小説の最大の魅力を的確に示したものであろうが、けっして千葉の言う「此の末尾の数行に、原作者の用意を尊重して、十分にそれを利用した着眼」というほど安易なものではない。多くの結末には、原作にない場面が涙香自身によって加筆

され、その加筆部分が作品により幸せなイメージを付与していることは事実である。しかしそれは単に結末に数場面を重ねただけではない。作中随所に布石をうち、それらが加筆された結末に滑らかにつながっていく工夫を重ねられていたのである。

III

ではその工夫とはどのようなものであったのだろうか。具体的に考えるにあたり、『古王宮』をとりあげたい。『古王宮』は、明治三十二年二月二十六日から同年五月十三日まで、五十四回にわたって同紙に連載され、その原作は Bertha M. Clay の *At War With Herself* であることは早くから知られている。先述のように、涙香が手がけた Bertha M. Clay を原作とする翻訳小説は、いずれも好評を博したが、なかでも『古王宮』の人気は高い。涙香作品中で「最も好評を得たるもの」のひとつに数えられ、「健全にして教訓的」で「家庭の読み物として見る、其価値不如婦、己が罪以上なり」（緒方流水「黒岩涙香」『黒岩涙香』前掲）と評されている。この『古王宮』は、直前を『絵姿』、直後を『雪姫』という、やはり Bertha M. Clay を原作とする連載にはさまれるかたちで登場し、この三つの作品で Bertha M. Clay ものの連作三部作が構成されている。『萬朝報』自体、各紙のなかで最大の発行部数を誇っていた最盛期でもあり、涙香が Bertha M. Clay を手がけるなかで最も勢いのあった時期の作品といえよう。そこでこの『古王宮』に焦点をあて、原作との比較によって、結末に至るまでに涙香が縷々加筆した過程とその意図を具に検証したい。まずは両者の梗概を簡単に述べる。

At War With Herself 梗概

ロンドン郊外に、かつて栄華を誇り今ではさびれたキングスコート女子校があった。十七歳のレオニー・レイナーは、家族もない教師見習いであるが、拝金主義者の校長テンプルトン女史から厄介者扱いされている。彼女はこの境遇を嫌悪し、愛と富、わけても爵位と財産のある生活に憧れて

いた。ある朝、弁護士が彼女を訪ね、彼女の父方の遠縁のチャンレイ伯爵の死により、彼女がその相続人となったことを知らせる。伯爵にはもう一人、ポール・フレミングという大尉が遠縁にいたが、レオニーのほうが伯爵家に近い縁戚であったためだった。故チャンレイ伯は、若くして爵位を継いだ、あるときロンドンから帰郷して以来、なぜか人が変わり厭世家となって、独身のまま五十六歳で急死したという。

地元の人々の大歓迎を受け、豪華な伯爵の館に迎えられたレオニーは、ある日、故伯爵が好んだという部屋で美貌の青年の肖像を見つける。それがポール大尉だった。ポールはマルタ島の駐屯地で、自分がチャンレイの爵位を相続しえなかったことを知ったが、その無念を人には語らなかつた。翌年五月、レオニーは自邸で自らの披露パーティーを催し、その美貌は王室でも話題になるほどの大成功をおさめる。社交界の華となった彼女は、あちこちに招かれ、バートラム・ゴードン卿に出会い、恋におちた。一方、バートラムの友人でもあるポールも帰国し、レオニーに会って心を奪われる。ポールは、将軍の娘で幼馴染のエセル・デアクル嬢をレオニーに紹介する。二人は意気投合してレオニーはエセルを館に逗留させる。だがエセルはポールをひそかに愛していることを誰にも語らず、レオニーもエセルの悲しい恋に気づかない。ただ、レオニーはエセルを『アーサー王伝説』の騎士ランスロットへの恋に散ったエレンのようだといい、悲しげな訳を尋ねるが、エセルは答えない。

レオニーはポールとバートラムを同様に遇し、二人の嫉妬を楽しむ。あるときレオニーは大舞踏会を催すことにし、仮装を企画する。バートラムは彼女に求婚するが、彼女はその舞踏会後まで返事を保留にする。彼女はメアリー・スチュアートに扮し、舞踏会は大成功をおさめるが、ある小道具が足りず、レオニーは古い衣裳部屋で探そうとする。幽霊が出るという噂で使用人も嫌うその部屋に彼女は一人入るが、そこで、故チャンレイ伯直筆の「愛した唯一の女性の息子ポールに、我が全財産を譲渡する」という正式な遺言書を見つける。彼女は衝撃を受け、しばし躊躇するが、今夜だけはこのままでいようと決意する。その夜、ポールが彼女にひそかに手

紙を渡す。舞踏会が終わると、彼女は遺言状を隠し通すか悩むが、ポールの手紙がプロポーズだったことを知り、これを受ければポールに伯爵家を相続させるも同然と考え、翌朝ポールと婚約し、愛するバートラムの求婚を断る。弄ばれたと信じ、ショックを受けたバートラムは生涯の別れを告げる。

レオニーは片時も休まず社交場に現れ、内心の葛藤を紛らわせようとする。だがあるとき、故伯爵の部屋にあったポールの母の肖像画の裏から、遺言を示唆する伯の手紙をエセルが見つke、全てをポールに譲るようレオニーに忠告する。レオニーは拒絶し、隠していた遺書をひそかに燃やそうとするが最後の瞬間に改心し、ポールに全てを告白すると、重ねて求婚するポールに断り、旅に出て駅で倒れる。発見された彼女は、伯爵の名跡を潔くポールに譲った高貴な姿勢を各紙で賞賛され、パレスティナにいたバートラムもそれを知り、駆けつけて彼女に求婚する。二人は結婚しバートラムは石炭王となり、屈指の富豪となってレオニーは再び社交界の花に返り咲いた。彼女は自らの過ちをふまえて苦境にある人々を救い、以前にもまして賞賛される。ポールは、彼を誰よりも愛していたエセルと結婚した。

『古王宮』梗概

英国のテムズ河のほとりにさびれた女子校があった。十八歳の稲川菱江は身寄りもなく、亡き母が教師をしていたこの学校で、校長の奥谷夫人に厄介者同然の助教師として扱われている。菱江はこの貧しい暮らしを悲観し、裕福になれることを切望していた。ある日、弁護士が彼女を訪ねてきた。そして柳園という伯爵が、「古王宮」と呼ばれる壮大な館と莫大な財を、遺族もないままに遺して死亡したという近來の噂の事件に関連し、実は菱江が彼の相続人であったことを知らせる。呆然とする菱江は弁護士から、伯爵の遠縁にもう一人、古水保路ふるみづやすみちという陸軍中尉で現在マルタ島駐屯地に居る青年がいることを聞く。

菱江は華々しい歓迎を受けて美しい「古王宮」に迎えられる。この壮麗

な館の故伯爵の部屋に、愛らしい少年の絵が飾られていたが、それが幼少時の保路だった。その保路は、柳園伯爵の相続人が予期に反して自分ではなかったことを知るが残念がることはない。一方、菱江は「三百年来現はれた事の無いと云ふ評判の美人」と絶賛されて貴族生活に馴染み、軍人のほこだたけお 戈田武男に出会って相愛の仲になる。程なく偶然に武男の友人であった保路にも出会い、菱江は遺産相続について気に病むが、彼は菱江に心を奪われ、相続の件は意にも介さない。保路は、將軍の令嬢で幼馴染の綾子を菱江に紹介する。綾子は保路を愛していたがそれを誰にも語らず、菱江とすぐに打ち解けた綾子は古王宮に身を寄せる。ある日、菱江は保路、綾子を、故伯爵の私室に伴う。彼の遺言により元のままであったその部屋には保路の亡母の肖像があり、額縁に「愛せり、失えり」と記されていた。

菱江は保路と武男を惹き付け、二人は菱江をめぐつてぎくしゃくする。ある日、菱江は舞踏会での寸劇を思い立つ。そしてその舞踏会の前日、武男から求婚され、保路からも求婚を仄めかされた菱江は良心の呵責を感じる。翌日、彼女自ら女王メアリー・スチュアートに扮した舞踏会は大盛況となるが、ある小道具を探すため、亡霊が出るという噂の衣装室に彼女が一人で赴くと、そこで「全財産を、愛した女性の息子、保路に譲る」という内容の、故伯爵の正式な遺言状を見つける。

衝撃を受けた菱江はすぐに保路に告白しようとするが、ただ今夜だけ「伯爵令嬢」として過ごそうと思直す。だがその日の終わりに、保路から正式に求婚された菱江は突如、保路と結婚すれば、爵位は彼に相続されたも同然という逃げ道を思いつく。保路の求婚に応じる傍ら、菱江は愛する武男の求婚を断り、武男はショックを受けてエジプトへ発つ。菱江は休みなく楽しみに没頭し、苦悩を紛らわせようとする。ある日、菱江は保路から例の母の肖像を模写のために貸してほしいと依頼される。だが梱包作業中の綾子が、額の中から、故伯爵から保路に宛てた「全財産を君に遺す」という内容の手紙を見つける。

綾子は菱江に話すが、菱江はその手紙が正式な遺言状でないことを盾に、保路に爵位を返すことを拒絶する。翌朝、保路にこの手紙を送ると言う綾

子に反発し、菱江は隠しておいた正式な遺言状を燃やそうとする。だがいざ火の前に立ったとき暖炉の火の粉がはじけたのを天罰と思い、改心する。菱江はすぐに保路の邸に赴きすべて告白すると、改めて求婚する保路に断り、身一つで駅からロンドン行きの列車に乗る。疲労困憊し車内で倒れた菱江は綾子に助けられ、彼女の家で療養する。新聞は菱江の言動を絶賛し、外地で全てのいきさつを知った武男も彼女のもとに戻り求婚して、二人は結婚する。菱江と別れ、失意にあった保路も伯爵となり、数年後に綾子と結婚した。武男は石炭王となり、両家は、今は大勢の子供に恵まれて親しく交流し、菱江のいた女子校は菱江を輩出した功績で繁盛している。

以上、両作品の筋は酷似しており、涙香の『古王宮』は、Bertha M. Clay の *At War With Herself* をもとに再構成されたものであることは疑う余地もない。しかしながら、大筋では原作に忠実でありながら、実はこの『古王宮』も結末に、涙香の筆による場面が加えられている。そしてその加筆により、万事に抜かりなく言及され、作品のハッピーエンディングの昂揚もいっそう高められている。しかしそれは、単に結末に数行を書き足しただけではなく、作品序盤から少しずつ重ねられた涙香の意図によって成功したものである。以下、*At War With Herself* を原作と称し、原作と異なる部分から涙香の意図を詳細に確認したい。その際、対照する登場人物はすべて『古王宮』の日本人名に統一して述べる。なお、ここでの原作は *At War With Herself* (New Bertha Clay Library No.78 Street & Smith Co. 1900) を用いた。

IV

『古王宮』の菱江は、二律背反を感じさせるヒロインである。第一に、彼女は富というものに多大な関心を寄せ、しかも冒頭からそれを露にする珍しいタイプである。最初に、貧しい学校生活に倦んで水鏡を覗いた彼女は「何だつて此様に美しく生れたらふ、生徒の中の美人と云ふ那の令嬢よりも此影の方が余ほど愛らしいのに、ア、お金が無ければ仕方が無い、

(中略) 誰も此顔を、美しいとも、何とも云ふては呉れぬ、生涯助教師を勤るから、何も綺倆などは要らぬのに」と嘆息する。だからその美貌を唯一評価するのも「女の運は綺倆に在るとか云ふ事だ、何の様な運が向て来ぬ物でも無い」という、未来への期待をつなぐ意味においてだけであり、最終的には「何うするにも斯するにもお金が先、ア、お金が欲しい、身代とやらが欲しい、貧しく生れるのは人間の一番損だ」という思いを深くする。だが偶然の幸運により、巨万の富を爵位とともに相続することになった菱江は、待望の財産を手にしながらか妙に落ち着かない。その権利の正当性を弁護士に確認しながらも、まだ見ぬ保路の思惑を懸念し自分の単独相続を「餘り不人情には當らずや」と気を揉み、「此家の立派なるを見るに就けても、我身の幸の多きだけ他の人は自分の損害の如く思ひ、我が喜ぶ丈け人は恨めしく思ふ筈なり、我身は此身代を半ば以上、爾る人々に分け與へても好しと思ふに、此心を割りて見する工夫は無きや」と案じ始める。そして実際に保路と初対面の折に「半分だけ相続を貴方に分ち度い」と切り出す。だが保路は相続には少しの未練も見せず、剩え「自分の財産は自分で造ると云ふ決心」を伝えて逆に菱江を氣遣う。こうして彼女が後顧の憂いもなく柳園家を相続できる条件が整えられるのである。

いっぽう、原作ではこうした叙述はかなり異なってくる。最初に貧しい身であった彼女が将来を夢見る冒頭は同じだが、こちらの菱江は“I ask for love and money. … Make me a lady of title and wealth”とつぶやいている。すなわち、原作のヒロインにとっては愛情を得ることが富を手にする事と同レベルでの望みなのであり、ただ貧しい現状の限られた生活では愛情を望むこと自体を想像しえなかったため、まずは「裕福な有爵の貴婦人でありたい」と願うのである。もとより自らの容姿については何の感慨も示さない彼女は、『古王宮』の菱江よりも純粋なイメージを与える。反面、この原作の菱江は柳園家を堂々と相続する。保路の存在は多少気にかけるものの、権利の分譲など考えもしない。逆に保路は、“… a soldier must bear the buffet of fortune as he bears the blows of the enemy, without flinching.”と自ら言い聞かせているように、内心では相続権への未練がまったくないわけでは

ない。だがいずれにせよ、若い彼らはほどなく相続問題の蟠りを忘れ、綾子や武男を交えて親交を深めていく。ここで原作の菱江は、保路と武男の二人を惹きつけて互いの嫉妬心をあおり、“… her heart thrilled with its new-born happiness” というようにそのことに喜びさえ感じ始める。だがこの場面での心境は、じつは『古王宮』の菱江も同様で、彼女は「武男と保路とを当分に弄びたる今までの面白さ」を忘れられず、「此自由なる身分」を捨てることを潔しとしない。だが『古王宮』の語りは、すかさずこういう。

既に幸福に酔ひて、快樂一方の人と為り、相当に令嬢たる者の守る可き心の境界を一歩踏越え、知らず〜に世の徒に男子を悩すを樂しとする妖婦てふ者の区域に入らんとするにはあらぬか、令嬢にして妖婦の心に近づくは既に墮落の初めなり（中略）若し嬢に父母あらば必ず誠しむる所なる可し

すなわち、菱江が「墮落」の際に立たされているのは、彼女に父母の不在が大きな要因のひとつであるとし、予め、そこに読者の注意を喚起しているのである。それは、菱江が柳園家を相続した折に、「若し此家の身内の人に、我身と親み合ふ人ありて、隔て無く言葉を交へ、悲みも喜びも互に打ち明けて語らふ様ならば如何ほどか安心なる可き」と考えることと相応じる内容であり、傍らにはつねに父親に庇護される綾子の姿も対照的に描かれる。原作にはないこうした細部の加筆により、菱江がよるべない頼りない身の上であることが、随所で強調されるのである。

その菱江は本心では武男を愛しており、「愛を換へるは貞女では無い、一旦心に定めた人には、死んでも誠を尽さねば」という信念もある。だが菱江がこうした思いに至るのは、パーティーで彼女を取り巻いた紳士たちを「彼の人か、此人かなど選り分る如く思ひ比べ、漸く一種の決心に達して」からである。原作の菱江が“… how entirely her mind had been occupied with a stranger …” というように、名も知らぬうちから武男に一途であった姿とは決定的な相違が感じられる。すなわち『古王宮』の菱江は、貞女神

話に縛られている従来の日本女性の表情を覗かせながらも、徒なイメージも捨てきれない。それゆえ、保路に求婚を仄めかされた時点で、菱江はさすがに「我身の不覚」を悟り「呼如何なれば我身は斯くまで彼れにつらきや」と「今更の如く身を責め」ていくのだが、それも「保路の願ひとあらば、此の古王宮を譲るさへ辞まざる心なれど、彼れが今請はんとする其の一事のみは応じ難し」というに至っては、矛盾を感じさせる。ストーリーの後半で財産に恋々としていく彼女に、実際にその選択肢——柳園家を保路に譲渡し武男との愛を全うするか、保路と結婚して不正相続を隠蔽するか、という二者択一がつけられたとき、彼女はさして迷わず後者を選択するからである。他方、原作では同じ場面において、保路の求婚は菱江が遺言状を発見した後とされている。そして保路に求婚されたからこそ、不正相続を隠蔽するという、彼女にとって好都合な活路が見いだされたのである。当然そこには、保路を惹きつけていたことに対する後悔をする時間もなければ、必然性も存在しない。それゆえ『古王宮』で時間の順序が逆に配されたことは、菱江の後悔が書き足されたという意味で重要となる。

だが最大の相違は、やはり菱江が遺言状を受け容れるに至る心境の変化であろう。菱江は、この不正な相続を隠蔽するために保路の求婚を受け容れ、最愛の武男と別れるという大きな代償を払う。ここで心変わりした彼女に詰問するのに、原作の武男は“false” “cruel wrong” “betray” と言う程度だが、『古王宮』での武男の言葉は「女の道」をふみはずした「不義不貞の女」「女でも無い此様な怪物」という激しい罵倒に変えられている。だがそれは、こうした面責にも耐えた彼女の、富と地位への執着をそれだけ強く感じさせる場面でもある。さらに原作にはないが、菱江が、保路から母の形見の指輪を贈られて「権利を横領する嫁」となることを自覚する場面や、ある横領事件を厳しく批判する保路の言葉を我がことのように慄き聞く場面も加筆されている。これらのエピソードが加えられたことにより、それらすべてに目をつぶってでも柳園家の財に執念を燃やす菱江の姿がいつそう鮮やかに浮かび上がる。それゆえ、『古王宮』の菱江がそれほど

までに執着した爵位と財を擲つことができたのは、じつは彼女自身の意思によるものではない。そこには、綾子の存在が大きく関与しているのである。

原作の綾子は、『アーサー王伝説』に登場する悲恋の乙女エレンに重ねられ、優しい篤実の女として描かれている。彼女にはいつも、保路へのかなわぬ恋が悲しい影を投げかけており⁽⁶⁾、故伯爵の遺言を発見した折にも、菱江と口論するほどの気強さはない。綾子は、ただ静かに“You will remember that I, who love you with a deep, true, disinterested love, have knelt here and pray you for your soul's sake to act rightly and honorably.”と菱江に告げるのみである。それゆえ、菱江は自ら考えて、隠しおいた遺言状を取り出し暖炉に熾された火にくべようとする。だがこのときの菱江の心中の葛藤はすさまじい。原題、“at war with herself”が示すように、恐ろしい悪魔の誘惑が聞こえる一方で、“I am going to commit a crime, … a crime for which in olden days men were hung.”という思いも胸をよぎる。しかし、燃え盛る炎の前でその葛藤に一人で耐えた彼女はついに、“The better nature had conquered the lower one, loyalty had beaten down falsehood, honor had shamed dishonor”というように、みずからの心を立て直し、長い悪夢から覚めたように、俄然保路のもとに走り、全てを告白するのである。

他方、『古王宮』の綾子は強情な菱江に対して「腹の底より怒りの念、込み上げて顔を火の如く赤く」する強気の女性として描かれ、二人の相克は絶妙の均衡を保って展開される。それゆえ菱江を即座に遺言状の隠してある場所へと駆り立てたのは、綾子の、「明朝の一番汽車に間に合ふ様に、保路へ手紙を認めました」という行動力であり、綾子に先んじようとする菱江の行動は、綾子に直接背中を押された感が強い。そして「今までの菱江嬢の振舞ひには多少察す可きところも有れど、手づから人の遺言状を焼捨てんとするに至りては許す可き所無し、焼くか焼かざるか、是れ善人と悪人との分るゝ瀬戸にして、嬢は浅ましくも悪人なるに決心し…」と語られるように、菱江は遺言状の焼却を明確な意志を以て決行しようとする。ただ、火に近づいた菱江の手と顔に火の粉が飛び、その「最と鋭き痛み」

に「恐れて震ひ上」がった彼女が、「天罰だ、天が誠め給ふのだ」と思うことがその行為の直接の抑止につながっている。じっと自らの心に対峙していた原作の菱江に対し、『古王宮』の菱江は、ここでも火の粉に踏みとどまるきっかけを与えられたといわざるをえない。そして良心の呵責ではなく、天罰の恐ろしさゆえに保路に柳園家を返還していくのである。

原作の結末では、菱江はその後も慈善活動に活躍するが、『古王宮』での菱江の役割はここで終了する。そして原作に同じく保路と綾子が結ばれる点に加えて両夫妻が「親類の如き間柄にて、双方とも多くの子」に恵まれ、無常の幸いを受けることが描かれていく⁽⁷⁾。『古王宮』の菱江は、保路との分割相続を図ろうとするなど、一見、原作の菱江よりも財への執着がなさそうに見えながら、実は原作以上に財産へ執着していたのであり、原作以上の紆余曲折を経て最終的に正しい道へと立ちかえる。それは決して厳密な意味で改心した行為にはあたらない。しかし原作以上に弱い存在として描かれた『古王宮』の菱江には、だからこそ、いざ正道に立ちかえったとき「女の鑑」と称賛され、一層の幸せが約束されていくのである。

涙香は、多くの作品において、こうした弱い意志の持ち主である女が、きっかけはどうあれ最後の瞬間に正しい結論を導き出すことを高く評価した。そしてそれが彼女らの命運の分かれ目であることを、随所に加筆することで読者により端的に示すことに成功したのである。同時代の読者に、より親近感を持たせうる、日本化されたヒロインの人生を描くことで、涙香は読者の共感を得ていったのであり、そこに織り込まれる原作にはない教訓をわかりやすく伝えていく工夫を重ねたのである。その明瞭さこそが、読者を魅了してやまない涙香小説の魅力だったのではないだろうか。

* 関場武先生には、学生時代から多くの貴重なお教えを賜りました。

心より御礼を申し上げまして

先生の今後のご健康とご活躍をお祈り申し上げます。有難うございました。

注

- (1) Mussel, Kay *Women's gothic and romantic fiction*. Greenwood Press, 1981
- (2) Johannsen, Albert *The house of Beadle and Adams and Its Dime and Nickel Novels: The story of a Vanished Literatuer*. (3 vols.) Norman: University of Oklahoma Press, 1950, 1962
- (3) Barnhart, Clarence L. *The new Century Cyclopedia of Names* Prentice Hall Trade, 1980
- (4) 拙論「尾崎紅葉『不言不語』と原作者 Bertha M. Clay」『文学』岩波書店、平成八年四月
- (5) 拙論「黒岩涙香『絵姿』とその藍本作家バーサ・M・クレイ」『英語青年』研究社、平成十三年二月・三月
- (6) ポールが友人と信ずるエセルに対してレオニーの魅力について語る場面、或いはレオニーの恋にやぶれたポールが、彼を見守り愛し続けたエセルと結婚する結末は、やはり Bertha M. Clay による『金色夜叉』の原作 *Weaker Than a Woman* に酷似している。ここでも最終的に、ヴァイオレットという美女に失恋するフィリックスが幼馴染イヴと結婚するのである。(拙論「『金色夜叉』の藍本」『文学』岩波書店、平成十二年十一月)
- (7) 最後は菱江の在籍した女子校の榮譽まで描かれているが、これも原作にはない。同じく、この前段階で、伯爵家当主となった彼女を後見の婦人が「教場で教へる積で何事も我に見習へと此様に思て居らつしやいませ」と鼓舞する場面、社交界に現れた彼女が「絶世の美人」であると同時に「言葉を聞きし人は綺儷に勝る才女」として人々に喜び迎ええられる場面を加筆することで、涙香は菱江が学業に従事していた身であることを評価し、結末への布石の一つとしたのであろう。